塙都文庫

拾八

へ 13
3339
17

門 ヘ13
3339
17

御領地黄之帳一切

加賀中上代

茶磯榮

武藤侯爵家文庫

目錄

一 和仲三年当市肥ゞ宮之年
永三年 宮殿の年
一 長助瀬脇して和仲より年
永永年 西夜山吟集の年

大正十八年 月 廿九 寄贈
本大學出版部

成簡陽都文庫

巻之拾八

上伊三年号又ちがえくすめる年

毎三年高野の年

東千四人の者いえ[illegible]

小松村なる市肥又[illegible]

きたもとうらじ[illegible]

よとなる移肥三年間年成

[illegible]
[illegible]三郎八[illegible]
[illegible]同じく[illegible]
[illegible]後[illegible]
時[illegible]三年[illegible]
[illegible]
くと叩きたれば[illegible]
[illegible]
を云つて[illegible]

[illegible]三年入[illegible]
只一[illegible]切例[illegible]
いらしもいらべ[illegible]
[illegible]三年いたつを八文字[illegible]
[illegible]
[illegible]
三年くぐを[illegible]
[illegible]

それゝばの上にまづ命のみ
うしと獨りの山にはいりて三年いる
よ四年よくゝと明くれば春
年ゝの又六郎四ちやうおどろ
きも深くよりてよをちくゝと詠歌
をしらのうたをまとまとて
あのくゝをとゝうと剃刀をきうざ
しの中を幸ひくよりかまてわ

命四いちやうをのみてみさめて
臨終をとゝうと明くるしし
時よ命を命いちやうよ明くるし
ういうよ又六ひつのよ春ゝ早
くをもうて獨りをもよくく
ひとりは山中人が悔なりあり
新の歌幸ひくよ獨りのよと
をしゝひとをとゝ仲も声くよ

若宮うけ〳〵若後たるよ切なく
ちこの時帝既又清盃あき
のがりて身行ひ〳〵間やるよ
く〳〵よりあるをいしく歌いうぐら
よ如る供ちうこうあく〳〵白を一段
ありて張げやく〳〵と唱うう孝
いと又ちうう琴を笛ちう山中
琴和のものあは目もうれ

声をちうぐよ只又ちをとすむ
とと紙く四中のあ後ども伝
承ぶ年うう事うて書うれ
清田能と若宮切てのる山中
琴も能ものへと乞ちう
して家をちしどく我ひうう
よ特能三年い光のごとくよ
ちうう〳〵と切まくるかる郷

内山弓右衛門と申侍の方へ後
つまて左右より切込申候よ
三年の内沼田と申す所を
そなへ口よりあれ申候
が首の所へ切付申候
内山叫申候
を後ろへ
申候一切仕申候

かく申候後の手負
申候無之助
つまて切て
年半ともなれば三人
数の内へ
て無御いづれも
をとゝよ右金兵衛
ども一口を出きて
ぞくそうして

孫ゝ丶や長助入ちの助仲を
ちのとゝろよりう油家父係多氏
を教し自ちこと丶ろれいちな
じ父の欲のゞ　はゞと花
ちのごゝ花うわゞ長助りな
い殺うゝゝ助仲をたちよ致ひ
ちうえ半ちの助いち多好の道
くことよ父の欲きちればちう

くうちてゆうきゝゝやまゝてく
をば長助ふきゝゝうゝよ
きうちとゝ弦をたゝゝで助仲
が自結の切先きうどゝ長助がを
殺ゝとゝ切ちゝた有きたなの長助
も自ちうちうゝく船家よたゝを
きちう助仲い長助のゝどめを
ゝだむうふをゝ長助ゝ家せば

長三郎長助いち原屋を浅田新
助と云ものいとこ名ゝ
ゝ腰巾の兄弟中く切えきりぐく
ゝ入て名ゝゝうちかければ
ゝへを切ふせ名ゝうちて中
いゝ名ゝいゝよ又ちを引ちう
しうとつれて兄弟新助をふり
先刻又ちゞ声をかけて名ゝ

ゝ名ゝゝで生ゝ新ゝ
新ゝへゞ腰ゞ止年をゆ
ものしして浅ゝ金ゝ三年
ゝゞれよりやとえとて新よ
特殊三年も寄年をゝ切ふせく
ゝよ生ゝてゝあ原を踏いる
名又ちい引ちゝ出ゝ名ゝば
三年ゆゝてゆゝ四郎

[illegible]
をさびしいぶし
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

まづ所作を進れるの后牛
をうして紫をを考ひ金
を極めし」とそげし紙をうひ
よ目もうひび金る後紙目を
の后ぐ進とうかゑひこと
るして童内ちうち袁のふ
屋ちう一日板して板根をきう
下ぐ行きもそげして進ま

中ら比奥市絵のみたちう
是よりて四人のものい角ぐ
くもうちう業ものそげども紙
きぐうも屋紙ちうちう三
年ふ少芝恒を切中ぐうを
見年て方行よ敬ききて
比々ふのみたちのところう進
矢しよ赤進命今おし

そもそは目よりあつまりて「ぎぼう」と
極と唱へられば元へもうり来
る故なりしを元をたてて力を
成り行自然の作業へきり
のくるよ元亦しい天地の
ことわり者なを捨ふよ
と是不思議と云事のなど
よりわれ者なり仏もよ

無数よりわれ動自で元始をそ
しりなりよりなりてよの行
でよの元始の日よりなりて
なよ年の始りさと言すき
一日更もなくなりを通し
てよの世よ数をなりの日やあり
し神や仏も親自で永く
をゆくなりふうなりけりや此

たをそこなくなは知て和
のめぐりてかうて考の角へなぐし
きこゆくいまさら信用をえも
うしふうとかつもとと外して法
ちづもこととうとうとうと

行を神仏に罪つくり恨み
いうて世をのつぞうし
まちまづ父の教の事会
ゆいいうあもしぞやとひと
きて如何いちはくちをぞを
ちひろ三ちに四ちに五ちに
ゆ助ぐちばく三ち引おこせども
ゆ助いうと思切きて見よ

きちぐ目でうきよちくゆ
うば如何いち書ちいうよ長物を
一頃家父伝を切書あ
して活牡丹のゆ物をちぐしを
いうちぐちちこちや叶
ちと世俗ぐと事ちよ白拍子
ヒと書付ちゆぐ助の若
き鳥をつき物ど活変を

数寄をしい秋をうぐ仕業をう
ちうれども業を海ぐ父親を
卿うう四年の志うざうて
有り物より多の脇物より累も
清らとのわい強び河うう
学すうとして出峯と家郎ぐうう
うう海長ぐうう刑のうとよふ
物をのうげ生ありうより云

助い者の小細をうて生ちうよ
多郷うもよ海うう多より海
長代ぐ任解うう金子の切
をそ年一次郎ぐ長もうく有
ぐううを学者ありう仲三年ぐ
そどうて紙うう多郷の姫後
それ長のううちぐきゆて人を
有きよ三年ぐ警篇より家

元亨二年の春のころ
男の犬の車又ちとも遠く
ず行くこうは因ぜしかり
いざ首を行りくとを駒い
ちがう事所の嫌悪なる
場合にて市体い時代をやって
もとこう流石流をとめる
父母多くい頼りて因縁中

を人目でちうざこう神社
祭りもちろん弟子の父い家公
ちきくちれば屋因ちあるべ
と時よ一知も家ちうくを公
母も事ちび頼りで因縁ちれ
しとは弟ちう犬の屋ちう
を行ちよどちて出ちた中
と母ちも年でちあるべ

とそれのこゝろをけ
しらず同じ心をよめるうたば
ちぢよ年のいとあさましやと
まさも涙よりぢけりを助も
ちぢ年たとへまして思ふ事の
山数きちりまつ首付て若
帰を助てちをれとそれを
まんと思ふよりまつ食

やてたのこをけりゆ
くぎ一ぢ一日一日仕ふ
蔵をりちまよ首ふ家ゆど
ぶて泣くこどの一日さ
面一ぢそのとを作へ市雑
又こ法ぶ方冥ぶ家
の百姓家へ道徳ふ
そそれば百姓ども
いき銭を呼

百人ばかりも集りて市神の
家を元屋敷の中にあり無量の嘉
ぎう御御祈ありどを多づくく
さや云しくくと出てのわび物
肥三年いちねよりあどうれこと
何年ぞと聞ねば百姓ども声
ぐよさやや盗御うち教せと
うてのれば方れよあどうれ

うけ流して方ぐうよ
を年て怪家すうあと呼れ
ども多皆の百姓もうあ年
おもひれば方ぐよあてある
中三年い是水もちく外をく
すうとてくが多根へ花
ようこのごとつうをて方言よ
いぢとのごとく数千石年四うあう

つてはるかに古墳の者どもよ
くよばつて生ちうのを別
しとどろ山のくまづくに行れ
よかれぐさなまうく盥郷
の報奉ちうに系くくよまうき
きよと村役人ぐも弥生りて板
るを辛しよ三年家根ちう
右ちう歌ちうの修繕をつぶ

さよ信ちうしよ定いちくりう
よ字紙してきぐよ部書をさ
ちうて塔を戸田市西原つ
つぐちうも記る三年中は
村役人をもうて番をなさも
塔ちうの山名紙を修繕ちう友
塔内あてい家記戸田修理内
戸田様古考の部書

をちこちに浮うて良刻をくん来西石塔
へ口上をれば方ちくいろく咲し
あれまづ生のものどもを始めて
吟味いたし一番に出紙一中
ごとに御用の名れば新色元を
右を始めへ口上に浮たるよう
始めへ方のものどもを蜂牛
百のうちふこれよ後て如仲新
三年差番をとうびて蜂牛へとは
ひとうう蜂目ゆは始めへ新
び出風ゆとへの間ゆは方辛をも
じめとして家を用へ口例よ
いたうまで勇を石て廟家
とふへとして行ケ旬ケ
うとを始へ山中兄ゆ如仲移此
三年つもをて寄の番よ

へいこう
平伊氏就付後
の侍所四条殿のとの仲
かまくらをはげてあるれ
ら如の文あるとも悔
き事なげく悔ども
上もなく
なしどくいをはげ
なほ尾之助の泉中まてまい
り合へとのたまふ

なけ
なほ家郎施ら浦へ
参命よ任所い
いらつ一口
殺ら始ら百年
百苦して敬を
と西面地へ来て
ら浦よ之助い付
らとら重ら

[illegible]ば上ら三千もそなへ田
の流くゆて宮金人のそなへ
て所直の三男を家りしら
仲なりよりし時来一家一上ど
こもらく今の流なでらくより
上なれば方年をもの法流へ
感ぜ上ものはあくらそれよ
俗て年四後四稲のの

まれら義士員女うあとさでよ
四男をりそれて来荒もけと
して白張十枚を りしおれ
就くも矢を男国よして麓
らく物をを壹をよとあのき
作よ三年中ら流よれ
て紙なりし法へよもりて
なさら陽副を辯亜されども

ゆるすこと九年
を期あらんよりて古寺あも出
家よ知識一百遍ゆ
却て三年い年四月中
も出家して四いとなる是き
しがらんもしらんと云
の仏あをたて年ごと
一万い誓願をくゆりてをなよ

あをたらまよりて三年つくし思
業をゆるしらんよりて新たれき
年しく出れの年ごと出て
遠云うよ好智の人出れと
そうらばゆ[illegible]いまぐらしび
ようて出よういまぐをうて
仏の誓願のおそたちをもて年ごと
らば人ごと早く仏のうらぐて

業ゞ由ゞ」を対とそこんといへば
却仲も者とそれよりは只の旅人
とそこして扨之朝そを出そして
そこ者ゆそと市肥又三郎ゆそ張の
拾ゆそを能そこの紙をそこ
ゞゞ手毎四度ゆそ拾よゆを殺して
人断人の又を活却ゆきしゆの
そこ問ゆそこよりて生も

そこれ出ゆれゆのどもそれば
そこれ自業自そくとゆよそゆの
却ゆも拾ゆそ市が願今ゆよ
たそゆふゆるゆのを第一半
今ゆそゆそづゆそ死ゆそ俗て
銀石を中分ゆそゆそゆのゆの
去年ゆよづゆそゆのゆの
市肥又三郎ゆ移ゆ